

Salon d'impressions

印象のサロン
Vol.5

東京・六本木の国立新美術館で8月16日まで開催されている「オルセー美術館展2010—ポスト印象派」。現代美術の源流ともいえる至宝115点が公開されている。各界の最前線で活躍する方々が「印象」をテーマにご自身の活動や作品への思いを語る「Salon d'impressions～印象のサロン」、第5回はクラシックからポピュラーまで幅広いジャンルで活躍中のギタリスト、鈴木大介さん。本展期間中、国立新美術館でもコンサートを催している。

現代人の「眠れる感覚」起こしたい

美術館でのコンサートが好きで、大原美術館やブリヂストン美術館でもコンサート経験がある。

音楽の聴き方が非常に個的になっています。しかも音楽なら音楽、絵画なら絵画だけというように、芸術をばらばらに切り離して受け取るようになっていく傾向が強い。しかし人間には、色々な感覚が融合して初めて得られる体験があるはず。

美術館で演奏していると本物の絵が強いエネルギーを発しているのを感じます。絵を見た人は普段にはない感覚が確実に目覚めているので、ここでは音楽も普段とはまた違った深い感覚で受け入れてもらえると思うのです。その効果で現代の人々が使っていない感覚を覚醒（かくせい）させてみたい。

オルセー美術館展でのコンサートには、ポスト印象派の画家たちの活躍期に重なる時代のフランスの作曲家の作品を中心に選曲。全回を通じてジャン・フランセにも焦点を当てている。美術館のロビーに響く、エスプリの効いたアコースティックサウンドは多くの来場者を魅了する。

フランス系が好きで、印象主義の作曲家として知られるドビュッシーやラヴェル、イベル、サティ、フランスの影響を受けた南米の作曲家の作品などを取り上げています。フランセは、一般には新古典主義の作曲家といわれ、非常に明快な作品を書き続けてきました。その作品には色彩豊かなたくさんのメロディーが詰まっていて、その魅力を再発見したいという思いもありました。

展覧会で最も注目するのがセザンヌの作品。中でも「ドラクロワ礼賛」には、セザンヌのバランスの取れた個性が表れていると思う。



ポール・セザンヌ「ドラクロワ礼賛」
1890-94年 油彩・カンヴァス 27×35cm
© RMN (Musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

今回の1点：ポール・セザンヌ作『ドラクロワ礼賛』

おおらかさが開いた新たな扉



すずき・だいすけ
(ギタリスト、洗足学園音楽大学客員教授)
1970年横浜生まれ。早稲田大学卒業後、94年に文化庁派遣在外研修員としてザルツブルク・モーツァルテウム音楽院に留学。以後、欧州各国で開いたリサイタルで高い評価を得て、世界を舞台に活躍する。アルバム「カタロニア讃歌～鳥の歌／禁じられた遊び～」で2005年度の芸術祭優秀賞を受賞したほか、第10回出光音楽賞など受賞多数。

鈴木大介さん



20代のころは、モネの光と色の官能性を追求した作品が好きで、これまでオルセー美術館を数回訪れましたし、「睡蓮（すいれん）」で有名なオーランジュリー美術館にも足を運びました。そのころはセザンヌを見てもよく理解できませんでした。が、年齢を重ねるにつれ、その素晴らしさが分かるようになってきました。

セザンヌをすてきたと思う最も大きな理由は、彼が主義や過去の否定にとらわれず、屈託がないこと。「ドラクロワ礼賛」にはそれがよく表され、印象派的なアプローチとは全く異なるロマン派の画家ドラクロワを称賛しています。そこに「素晴らしいものは素晴らしい」と言い切る、セザンヌのおおらかさ、純粋さを感じます。

良い現代音楽を将来に残す

音楽の世界でもセザンヌのような存在が世に出ていけば、どんな展開になっただろうと考える。

ドビュッシーは、しばしばモネに例えられます。モネが純粋な光や色の美しさを追求したように、ドビュッシーは音響やハーモニーそのものの美しさへの扉を開きました。しかし美術界ではその後、セザンヌが出て、改めて力強い具象性を取り戻すような作品を生み出していったのに対し、音楽界ではセザンヌに例えられるような作曲家がいませんでした。

これは音楽の印象主義が美術のそれより若干遅れ、醸成期が世界大戦の時期に重なったことが大きいと思います。そのため「ポスト印象主義」的な模索や挑戦なしに、一足飛びに抽象主義的なところまで飛躍してしまっただけです。特に1960年代以降のフランス音楽は極度に抽象志向でメロディアスなもの、分かりやすいものが否定される傾向になり残念に思っていました。セザンヌのような屈託のない寛容さを持って、自分の道を開拓していくというあり方はいつの時代にも大切だと思っています。

ギターを始めたきっかけは、小学校の担任が教室で弾いてくれたこと。生演奏の力に触れた原体験を忘れずに新境地を目指す。

先生にしてみればクラスの騒がしさに困っての苦肉の策だったらしいのですが、僕はそれですっかりギターに魅了されました。8歳のときから近所のギター教室に通い、18歳からは作曲も学びました。プロデビューは1995年ですが、クラシック音楽を中心に活動しています。これからの目標はまずバッハのチェロ組曲を自分なりに表現すること。ピリオド・アプローチ（作曲された時代の奏法に忠実に弾く手法）の要素を入れつつ、現代のギター音楽としてのバッハを演奏していきたい。またジャン・フランセが2012年に生誕100年となるので、まとまった形で弾きたいと思っています。

さらに、僕のルーツである日本の現代音楽でも新作にどんどん挑戦していきます。僕には「良い現代音楽を将来に残したい」という一貫した思いがあります。作曲家の要望にも応えながら、どう自分が現代音楽を創（つく）っていくのか、非常にチャレンジングなことを感じます。多彩な分野に挑戦して、多くの刺激を受け、いつも新鮮な気持ちで演奏したいと思っています。それは、セザンヌのバランス感覚への憧憬（しよけい）にもどこかで通じているかもしれません。